

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

第15次連合ボランティア 報告②

●住田ベースキャンプを基地に

岩手県住田町にある住田キャンプで寝食を共にした仲間は、日教組本部の池浦芳則さんを団長に日教組から17人、全電線4人、全水道12人、全労金3人、関東・東海・関西・九州の各県連合から27人の計63人、5泊5日間を共に過ごしました。日教組の参加者名(単組)は次の通りです。池浦芳則(日教組本部)、白鳥宏幸・高野名伸行(北海道)、高橋剛史・長岡正宏(山形高)、鈴木美智子(群馬)、椎名久和(埼玉)、野坂訓由・山中良晃(福井)、位田篤史(愛知)、上田浩祥・大柿健(滋賀)、南部猛・畑野みなみ(山口学組)、安田均・大久保則夫(宮崎)、松元史年(宮崎高)。



活動する大船渡からバスで50分の所に住田ベースキャンプはありました。住田町の山奥、廃校になった五葉小学校の体育館と、隣接して建てられた公民館の施設を利用させていただきました。朝晩は気温が17度ぐらいで長袖の上着がないと寒いくらい。本部事務所と食堂、女性3人の宿泊用の和室は新築の公民館内にあり快適でした。一方、男性は体育館に60人がビニールシート上に布団を敷いてごろ寝。広い体育館に響くいびきはさほど苦にはなりません、トイレに立つ人の足音(振動)で起こされることもあり、体育館で避難生活をされている被災者の苦労を少し

知ることができました。朝夕の食事は地元の家族経営の仕出し屋さんの手作りで美味しくヘルシーでした。昼は大きなおにぎりが2つでした。

●大船渡、陸前高田へ出発

毎朝8時20分にベースキャンプを出発して、大船渡の社会福祉協議会前のセンターに集合します。そこでその日の仕事の振り分けが行われました。作業内容は、道路の側溝の清掃、アパートや民家の床下の泥だし、ホテルの片付け、避難所の救援物資の整理、一般住宅の引越し手伝い、住宅の庭の瓦礫清掃など。13班に分かれてボランティアの方のワゴン車に分乗して現地へ向かいます。午前中2時間、午後2時間作業して15時過ぎにはセンターから温泉へ直行。汗を流してベースキャンプに帰るの





は結構距離があるため18時を過ぎます。たった一日4時間の作業とはいえ、マスクとカップ、長靴を装着しての慣れない肉体労働。結構疲れます。大船渡の被災家屋は半分程度で、休憩できる日陰は確保できますし一部営業中の店舗もあり生活感がありました。一方、陸前高田の方はあたり一面壊滅し、更地なので日陰もなく大変だったと聞いています。

●たくさんのボランティアの方々

全国各地からたくさんのボランティアの方々が参加されていました。まず、連合の住田の63人以外に、岩手県だけで東和に49人、宮古に39人。さらに福島県や宮城県にも派遣がありました。大船渡では東京の大学生や個人参加も多数来られていました。外国からも”オールハンズ”という団体が総勢130人も来られていました。米国から来られている人が多く、入れ替わりながら9月まで活動を継続するそうです。日本人を代表してお礼を述べさせていただきました。ほかに、ボランティアを支えるためにカキ氷やコロケ弁当を配ったりする業者の方もいましたし、触発された地元の大工さんや東京で働いていた地元出身の若者も一時帰省していっしょに泥だしをしていました。



●最後に

この原稿を書いている最中に、山形高教組の長岡さんから、今回のボランティアの様子をまとめた「字幕付きのライドショーのDVD」が届きました。彼の素晴らしい言葉が中に散りばめられていましたので以下に紹介します。ちなみに、ライドショーのBGMはミスチルの「彩り」でした。

私たちの目の前にあったのは、震災から4ヶ月が経った被災地の姿でした。予想されたとおりの暑さとの戦い。予想外の寒さとの戦い。側溝の泥だしや個人宅・ホテルの片付けと消毒、支援物資の運搬、時には自衛隊の撤収の補助もありました。国境を越えた復興支援。一つ一つの作業が果てしなく達成感のないものばかりだけど、必ず復興することを信じての活動でした。今では五葉小学校のベースの生活を含め、5日間続いた日々の風景を懐かしく思います。被災者の合言葉は「がんばろう」ではありませんでした。「一歩ずつ前へ」、「よみがえれ大船渡」、「明日へ進もう！！いわて」、「津波なんかには負けないぞ！」など具体的な言葉に逆に勇気づけられることもありました。少しずつだけど、再生の過程も目にすることができました。”ひとりひとりのなんてことのない作業”が集結した5日間。我々がやってきたことは誰かに褒められるわけではないけれども、きっと被災地に暮らす誰かの笑い声を作ってくれるはずです。被災地の生活・心・街並みに、一日でも早く「彩り」がもどりますように願っています。そして、そんな姿をまた見に行きましょう。